

『万葉集』ドイツ語訳における序詞の受容—同音類音反復式の序詞を中心に—

フィットレル・アーロン

はじめに—『万葉集』歌の主なドイツ語訳

※ 翻訳本の詳細情報については本資料末尾の9～10頁目、「『万葉集』の主なドイツ語訳情報」を参照

翻訳者	出版年	翻訳歌数	備考
フィッツマイヤー (Pfizmaier)	1872	216	
フローレンツ (Florenz)	1894	30	
岡崎	1898	約50	学位論文 未見
岡崎	1899	未詳	日本文学史 未見
フローレンツ (Florenz)	1904	104	日本文学史
ロレンツェン (Lorenzen)	1927	87	学位論文
E. E. フローレンツ (Eduard Emmerich Florenz)	1933	未詳	未見
藤代	1939	未詳	未見
小城	1962	19	
平野	1985	70	未見
アーノルド・カナモリ (Arnold-Kanamori)	1999	193	文法書
ヴェィットカンブ (Wittkamp)	2014	292	研究書

1. 『万葉集』ドイツ語訳における序詞の翻訳方法

【参考】序詞と心情部との内容的な関係

白井伊津子「序詞の意味と形式」(『萬葉』第181号、2002年7月)、後、白井伊津子著『古代和歌における修辞』(塙書房、2005)後篇第7章

A 音の関係と意味の関係のいずれもが顕わな例

足常 母養子 眉隠 隠在妹 見依鴨

たらつねのははがかふこのまよごもりこもれるいもをみむよしもがも¹ (2495)

B 音の関係が顕わな例

路後 深津嶋山 顰 君目不見 苦有

みちのしりふかつしまやましましくもきみがめみねばくるしくありけり (2423)

C 意味の関係が顕わな例

湊入之 葦別小船 障多見 吾念君尔 不相頃者鴨

みなといりのあしわけをぶねさはりおほみあがおもふきみにあはぬころかも (2745)

D 音の関係と意味の関係のいずれもが顕わな例

真野之浦乃 与騰乃継橋 情由毛 思哉妹之 伊目尔之所見

まののうらのよどのつぎはしこころゆもおもへやいもがいめにしみゆる (490)

『万葉集』ドイツ語訳における序詞の翻訳方法

序詞と心情部の関係を内容的にまたは文法的につなげない

- 原典でもつなげない (13例)
- 原典では音のみが顕わになっている (同音類音・掛詞) が、翻訳ではつなげない (9例)
- 原典ではつなげるが翻訳にはつなげない (11例)

序詞と心情部を内容的にまたは文法的につなげる

- 原典でも (譬喩的) 関係が顕わになっている
 - ① 直喩として訳出 (37例)
 - ② 時間的に・空間的に結びつける (7例)
 - ③ 対照 (3例)
 - ④ その他のつなげ方 (7例)
- 原典では音のみが顕わになっており (同音類音反復・掛詞)、翻訳でも同様 (5例)
- 原典では音のみが顕わになっている (同音類音反復・掛詞) が、翻訳では内容的に顕わ

¹ 特に断りのない限り、和歌の本文は日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』による。

にされている

- ① 直喩の創作 (4 例)
 - ② 隠喩の創作 (1 例)
 - 原典では顕わになっていないが、翻訳では顕わにされている
 - ① 直喩の創作 (4 例)
 - ② その他の譬喩 (隠喩など) の創作 (原典にない比喩などの内容を追加する) (2 例)
 - ③ 時間的に・空間的につなげる (2 例)
 - 原典では音と内容のつながりの両方が顕わで、翻訳でも同様
 - ① 直喩としての訳出 (3 例)
 - 原典では音と内容のつながりの両方が顕わであるが、翻訳では内容のつながりのみ (1 例)
- ・ 目標言語の同音異義の表現を活用して訳出 (1 例)
 - ・ 同語・同音反復の創作 (原典にない同語・同音反復による復元) (2 例)
 - ・ 言葉遊びの創作 (1 例)
 - ・ 序詞を心情部の背景である修辞と見ないと見られる (誤認) (18 例)
 - ・ 序詞と心情部の関係を把握しないと見られる (誤認) (4 例)
 - ・ 序詞の一方のみ訳出 (掛詞式の場合) (1 例)
 - ・ 序詞の省略 (4 例)
 - ・ 序詞を訳出しない (原文のまま掲げる) (1 例)

2. 序詞のドイツ語訳における理解—①翻訳者別の例—

2.1. フィッツマイヤー訳における序詞の理解

2.1.1. 序詞を心情部の背景である修辞と見ないと見られる

【資料 1】 526 番歌

チトリナク サホノカハセノ サレナミ ヤムトキモナシ ワカコフラクニ²
千鳥鳴 佐保乃河瀬之 小浪 止時毛無 吾恋爾²

Der Brachvogel singt! | Die kleinen Wellen | der Stromschnelle des Flusses Sawo | stehen still zu kleiner Zeit, | wie ich es liebe.

[鳴が歌っている。サヲ川の瀬の小さな波が静かに止み、どれほど私はこれを好んでいるのか。³]

² 原文はフィッツマイヤー訳所収の原文による。

³ ドイツ語訳の日本語逐語訳は発表者による。

【資料2】575 番歌

クサカエノ イリエニアサル アシタツノ アナタツタツシ トモナシニシテ
草香江之 入江二求食 蘆鶴乃 痛多豆多頭思 友無二指天

Der an der Bucht des Flusses | von Kusa-ka Nahrung suchende | Storch des Schilfrohrs | ist
schmerzlich abgeschnitten, | da er keine Gefährten hat.

[クサカの入江に餌を探っている葦のこうのとりは痛いほど切られている [切られている
ほど心が折れている]、彼は相手がいないので。]

2.1.2. 目標言語の同音異義の表現を活用して訳出

【資料3】568 番歌

ミサキワノ アライノニヨスル イホヘナミ タチテモホテモ ワガオモヘルキミ
三崎廻之 荒磯爾縁 五百重浪 立毛居毛 我念流吉美

Die gegen das wüste Ufer | des Randes der drei Vorgebirge | dringenden fünfhundertfachen Wellen,
| bald erheben sie sich, bald weilen sie – | Unser Gebieter, an den wir denken!

[三つの崎の浜の荒磯に入り込む五百重の波が起きたり立ち止まったりする。—私たちが
思っている私たちの主人よ。]

2.2.3. 原典では音のみが顕わになっており（同音類音反復・掛詞）、翻訳でも同様

【資料4】491 番歌

カハカミノ イツモノハナノ イツモイツモ キマモワガキヨ トキシクメヤモ
河上乃 伊都藻之花乃 何時何時 来益我背子 時自異自八方

An der Flusses Ufer | die Blüthen der Pflanze „Wann?“ | wann, o wann | kommen sie? Mein älterer
Bruder, | die Zeit wird ihn trennen.

[川岸に、「いつ」草の花、いつ、いつあなたが来るのか。私の兄よ、時が分かれてしまい
そうだ。]

2.2. フローレンツの序詞に関する指摘

【資料5】『日本文学史』の「序」（序詞）に関する説明

ジョ「序文」（Einleitungen）は文または複数の文節単位の、ひとつの言葉またはひとつの言
葉の音節を修飾するものである。その内容は冠されている言葉だけの特徴であり、詩[全体]
との関係は完全に切られている。拡大された枕詞（Kissenwörter）である。（中略）我々の感
覚はこのような修辞を、過度に形式的で外面的であり、芸術的統一性を損するものとして遠

慮する。(Florenz, 1904, 26 頁)

【資料 6】『古今集』恋二・559 (藤原敏行) のフローレンツ訳

住の江の岸による浪よるさへやゆめのかよひぢ人めよくらむ

An Suminoye's	スミノイエの
Küste <u>nahen</u> die Wellen –	岸に <u>近づく</u> 波—
Selbst in der <u>Nacht</u> , auf	<u>夜</u> にさえも、
Dem Weg zu dir im Traume,	君への夢での道に、
Werd' Menschaugen ich meiden. ⁴	私は人目を避けるだろう。

【資料 7】『万葉集』3626 番歌のフローレンツ訳

多都我奈伎 安之倍乎左之弓 等妣和多類 安奈多頭多頭志 比等里佐奴礼婆
たづがなきあしへをさしてとびわたるあなたづたづしひとりさぬれば

Nach dem schilfbewachsenen Ufer	葦が生えている浜へ
Ziehen Kraniche in Schwärmen;	鶴が騒めきながら飛んでいく。
Ach! und einsam und verzweifeld	ああ！独りで、不安に
Muss die Nächte ich vertrauern.	私は夜々嘆かなければならないのだ。

2.3. ロレンツェンの序詞に関する理解

2.3.1. ロレンツェンが参照した『万葉集』注釈書・解説書

- 鹿持雅澄『万葉集古義』(1891)
- 橘千蔭『萬葉集略解』(1903)
- 次田潤『万葉集新講』(1925)
- 折口信夫『万葉集 現代語訳付』
- フローレンツの『日本文学史』、『日本紀』、『神道の歴史資料』

2.3.2. 序詞に関する説明

【資料 8】ロレンツェン論文第二章の枕詞と序詞の説明

ジョ、序 (Vorreden) は (発表者注—枕詞と) 同じ種類の修辞に属し、完全な文からなり、形式は枕詞に比して必ずしも決まったものではない。これらは多く比喩を含む。(Lorenzen,

⁴ 斜字部分は出典において異なるフォントとなっている。下線は発表者による。

1927, 76 頁)

瞬間的で個人的な外界から来る緊張感が、このような感情の世界を、ひとつひとつの言葉の詩全体における論理的な関係性が後退するほど強く支配する。しかしこのように枕詞によって論理性が後退すると、心理描写が前面に出され、詩人の本格的な立場が表されるようになる。(Lorenzen, 1927, 78 頁)

2.3.3. 直喩の創作（原典では序詞と心情部の関係が顕わでない例）

【資料 9】 503 番歌

珠衣乃 狭藍左謂沈 家妹尔 物不語来而 思金津裳

たまきぬのさみさみしづみいへのいもにものいはずきにておもひかねつも

Um (das Klagen, das da klang wie)

1/2 das Rascheln gewebter Kleider, zu beruhigen,

4 bin ich hierher gekommen, ohne mich auszusprechen

3 mit der Geliebten –

5 unerträglich ist meine Sehnsucht.

[織った衣の擦り音 (のように聞こえる訴え) で [自分を] 落ち着かせて、好きな人に物言わずにここに来た。私の物思いが耐えられない。]

2.3.4. 直喩の創作+同音反復の復元（原典では音と内容のつながりの両方が顕わである例）

【資料 1 0】 135 番歌

..... (9) 玉藻成 (10) 靡寐之児乎 (11) 深海松乃 (12) 深目手思騰.....

.....たまもなすなびきねしこをふかみるのふかめておもへど.....

12 Indem ich meine Liebe vertiefe,

11 tief wie das Tiefsee gras, liebe ich zwar

10 das Mädchen, mit dem ich geschlafen habe angeschmiegt,

9 wie sich das schöne Seegrass anschmiegt.

[(12) 私の恋を深める、(11) 深海藻のように深く愛している、(9) 綺麗な海藻が寄り添うように (10) 寄り添って寝ていた女子を。]

2.3.5. 序詞を心情部の背景である修辞と見ないと見られる

【資料 1 1】 264 番歌

物乃部能 八十氏河乃 阿白木尔 不知代経浪乃 去辺白不母
もののふのやそうぢかはのあじろきにいさよふなみのゆくへしらずも

2/3/4 Die Wellen, die vor dem Holz

(des Rahmens) der Fischerfangkörbe des Udji-Flusses sich stauen,

5 wissen nicht, wohin sie gehen sollen.

[ウジ川の魚取り籠 (の枠の) 木からたぎる波は、彼らがどこへ行くべきなのか知らない。]

【参考】

・『万葉集古義』の注

歌ノ意かくれたるところなし

・『万葉集新講』の現代語訳

宇治川の網代木に堰かれて暫したゆたふ波が、やがて流れ去つて行方知れずなるのは、まことにはかない事である。

・折口信夫『万葉集 現代語訳付』の注記

此歌に人生観を寓した様に説くのは誤だ。

2.4. ヴェットキャンプ訳での序詞

2.4.1. ヴェットキャンプが参照した『万葉集』注釈書

沢瀉久孝『万葉集注釈』（中央公論社、1957～77）、中西進著『万葉集全訳注原文付』（講談社学術文庫、1978）、新編の本古典文学全集 6～9『万葉集』（小学館、1994）、稲岡耕二『万葉集』（和歌文学大系 1～3、明治書院、1994）、井出至・毛利正守『新校注万葉集』（和泉書院、2008）、多田一臣『万葉集全解』（筑摩書房、2010）

2.4.2. 序詞と心情部を文法的につなげない（原典でもつなげない例）

【資料 1 2】 526 番歌

千鳥鳴 佐保乃河瀬之 小浪 止時毛無 吾恋者
ちどりなくさほのかはせのさざれなみやむときもなしあがこふらくは

Tausend Vögel rufen

千羽の鳥が呼んでいる

An des Saho Stromschnellen

サホの川瀬に

Kleine Wellen

小さい波

Ohne jemals aufzuhören

Diese meine Sehnsüchte.

いつまでも止まない

私のこの物思い。

2.4.3. 同音類音反復の復元

【資料 1 3】 68 番歌

大伴乃 美津能浜尔有 忘貝 家尔有妹乎 忘而念哉

おほとものみつのはまにあるわすれがひいへにあるいもをわすれておもへや

In Ōtomo am

Strand von Mitsu liegt eine

Vergessenmuschel

Zu Hause ist meine Frau

Wie sollt' ich sie vergessen?

オオトモに

ミツの浜で

忘れ貝がある

家に私の妻がいる、

どうやって彼女を忘れるだろうか。

【資料 1 4】 2468 番歌

潮葦 交在草 知草 人皆知 吾裏念

みなとあしにまじれるくさのしりくさのひとみなしりぬわがしたもひは

Im Schilf an der Mündung

Wildwachsene Gräser, dort

Die Wissen-Gräser

Alle Leute wissen es

Meine heimliche Sehnsucht

水門の葦の中に

野生の草、そこに

知り草

どの人も知っている

私の隠された物思いを。

2.4.4. 内容的な繋がりのみが顕わにされている＋説明的な補償

【資料 1 5】 1041 番歌

吾屋戸乃 君松樹尔 零雪之 行者不去 待西将待

わがやどのきみまつのきにふるゆきのゆきにはゆかじまちにしまたむ

In meinem Garten

Auf die Kiefer, die Baum, der auf dich wartet,

Fällt Schnee, aber weggehen

Wie der Schnee, woll'n wir wohl kaum

Und warten immer weiter

私の庭の

君を待つ木である松に

雪が降るが、行くことが

雪のように、なかなかしようとせず

いつも待ち続けている。

3. 序詞のドイツ語訳における理解—②一首の歌の複数の翻訳—

【資料16】501番歌

未通女等之 袖振山乃 水垣之 久時従 憶寸吾者
をとめらがそでふるやまのみづかきのひさしきときゆおもひきわれは

【資料17】フィッツマイヤー訳（序詞の一方のみの訳出・空間的に結び付ける＋隠喩）

Seit der langen Zeit | der Wassermauer | des den Ärmel der jungen Mädchen | schüttelnden Berges
| in Gedanken war ich.

〔乙女たちが袖を振る山々の水垣の長い間で、私は思いをしていた。〕

【資料18】ロレンツェン訳（直喩として訳出・言葉遊びの創作＋同語反復）

5 Ach ich, der ich mich sehne

4 seit langer Zeit, so lang

3 wie der Tempelzaun dasteht

1/2 auf dem Winkeberg, wo liebliche Mädchen mit dem Ärmel winken.

〔(5) ああ、私が恋い慕っている、(4) 長い間、(1/2) 愛おしい少女たちが袖で手招きする手招山の上の(3) 寺の垣が建っているように長い間。〕

【資料19】ヴィットカンブ訳（同語反復＋言葉遊びの創作・直喩としての訳出）

Die Jungfrauen schütteln

若い女性たちが袖を振る

Ärmel – alter Schüttelberg

—古い振山

Alt wie die Hecken

生垣のように古い

Seit so langer Zeit bereits

もうそのように長い年月を

Erinnerte ich mich schon

私が思い出してきていた。

『万葉集』の主なドイツ語訳情報

- Pfizmaier, 1872 = August Pfizmaier: *Gedichte aus der Sammlung der zehntausend Blätter* [万葉集の詩] Kaiserliche Akademie der Wissenschaften, Wien, 1872
- Florenz, 1894 = Karl Florenz: *Dichtergrüsse aus dem Osten: japanische Dichtungen* [東の国か

- ら詩人たちの挨拶—日本の詩—] C. F. Amelangs Verlag, Leipzig, 1894
- 岡崎, 1898 = Tomitsu Okasaki (岡崎遠光): *Manyōshū: eine kritisch-ästhetische Studie* [万葉集—美的研究—] Duncker & Humbolt, Leipzig, 1898
 - 岡崎, 1899 = Tomitsu Okasaki: *Geschichte der japanischen Nationallitteratur: von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart* [日本の国文学史—古い時代から現代まで—] Brockhaus, 1899
 - Florenz, 1904 = Karl Florenz: *Geschichte der Japanischen Litteratur* [日本文学史] C. F. Amelangs Verlag, Leipzig, 1904
 - Lorenzen, 1927 = Alfred Lorenzen: *Die Gedichte Hitomaro's aus dem Manyōshū: in Text und Übersetzung mit Erläuterungen* [万葉集の人麿の詩—テキストと翻訳と注釈—] Veröffentlichungen des Seminars für Sprache und Kultur Chinas an der Hamburgischen Universität, Heft 1, L. Friederichsen, 1927
 - Eduard Emmerich Florenz, 1933 = *Die Langgedichte Yakamochi's aus dem Manyōshū: in Text und Übersetzung mit Erläuterungen. I. Einleitung und Naga-Uta Buch III, VIII, XVII, XVIII* [万葉集の家持の長歌—序説と第三・八・十七・十八巻の長歌—] Veröffentlichungen des Seminars für Sprache und Kultur Japans an der Hamburgischen Universität, Nr. 4, Asia Major, 1933
 - 藤代, 1939 = Teisuke Fujishiro (藤代禎輔): *Gedichte aus dem V. Buch des Manyō-shū* [獨譯萬葉集第五卷鈔] 藤代博士記念事業會編輯, 藤代博士記念事業會, 1939
 - 小城, 1962 = Masao Ogi (小城正雄): *Die Gedichte aus dem "Manyōshū": übersetzt aus dem I. und II. Band der Sammlung* [万葉集の詩—第一巻と第二巻からの翻訳—] Selbstverlag [個人出版], 1962
 - 平野, 1985 = 平野武雄: *Mannyoshu ins Deutsch, Band II: 70 Ausgewählte Gedichte* [萬葉集独訳七十首: (第二巻)] 1985
 - Arnold-Kanamori, 1999 = Horst Arnold-Kanamori: *Manyōshū. Eine Auswahl* [万葉集要解] Klassisches Japanisch, 3, Satyr, 1999
 - Wittkamp, 2014
 Robert F. Wittkamp: *Altjapanische Erinnerungsdichtung: Landschaft, Schrift und kulturelles Gedächtnis im Man'yōshū (萬葉集)* [古代日本の記憶詩歌—萬葉集における風景、表記と文化的記憶—]. *Prolegomenon: Landschaft im Werden der Waka-Dichtung* [序説—和歌文学における風景の生成—] Beiträge zur kulturwissenschaftlichen Süd- und Ostasienforschung, herausgegeben von Franziska Ehmcke und Andreas Niehaus, Bd. 5, 1., 2014
 Robert F. Wittkamp: *Altjapanische Erinnerungsdichtung: Landschaft, Schrift und kulturelles Gedächtnis im Man'yōshū (萬葉集)* [古代日本の記憶詩歌—萬葉集における風景、表記と文化的記憶—] *Schriftspiele und Erinnerungsdichtung* [表記遊戯と記憶詩歌] Beiträge zur kulturwissenschaftlichen Süd- und Ostasienforschung, herausgegeben von Franziska Ehmcke und Andreas Niehaus, Bd. 5, 2., 2014